

# 目 次

## MOKUJI

ぼくは、だれでしょう……………	三迫 初男……………	1
新 春 回 顧……………	森田 武……………	2
借別のスケッチ……………	中井 正文……………	3
総合科学部と旧制広島高等学校同窓会について (広島大学総合科学部報No.3)の所感……………	(広島同窓会) 瀬良 文夫……………	5
私にとって婦人解放とは —西田計氏に捧ぐ— ……	嶋田千恵子……………	6
私 の 研 究……………	武森 重樹……………	7
総合科学部に着任して —光・物質・エネルギー— ……	大林 康二……………	8
わが青春の年輪……………	松浦 道一……………	9
思い返して……………	富田 晃次……………	11
逃 避……………	岩田 尚文……………	12
昨日 今日 明日 ……	安藤 正昭……………	13
寂しがりやの個人主義……………	村田 格……………	13
断 想……………	海老原直邦……………	15
愛 と 不 信……………	白石 健二……………	16
「薬は、本来、毒である」……………	情 報 I……………	17
最近の微古生物学……………	加藤 道雄……………	18

### 特集「三つの書評」

○上山春平、梅原猛「日本学事始」を読んで……………	門 秀一……………	20
○福永武彦「忘却の河」……………	深 萱 和男……………	21
○有吉佐和子「複合汚染」をめぐって……………	根平 邦人……………	23

学 部 の 記 録……………	25
----------------	----

編 集 後 記……………	25
--------------	----

## ぼくは、だれでしょう

三 迫 初 男

“あの子はだあれ、だれでしょね”という歌はあるが、この年になって、“ぼくは、だれでしょう。”などというのは、いかにもおかしい話である。ちゃんと姓名もある。職業もきまっている。住所もあり、戸籍もある。“いつこの人なるかを知らず。”ということもない。人が見ても、白髪頭で、痩せた男というイメージは明瞭である。でも、自分自身、ぼくは何者であるのか、あんまり明瞭でないから、まことにおかしい。

一応は論語や孟子を読んだり、講義をするから、漢文の先生で通っている。しかし、論語読みの論語知らずの非難はまぬかれないだろう。庄子などという怪物も、ときどき感心はさせられるものの、ぼくとは違ったところに住んでいる存在のようだ。カントの着眼に敬服したり、ヘーゲルの屁理屈に辟易したり、マルクスの妖怪を追いかけたり、サルトルの描く人間に考えさせられたり、ケルケゴールの言うままに絶望したり、あるいは禅龕祖室の扉を叩いてもみる。キリスト教のバイブルも夢中になって読んだうちのひとつであった。けれども、論理の積み重ねも、最も基底に、闇黒のなかにうづくまる何ものが分らぬ限り、砂上の楼閣にすぎない。自分の子を十字架の上に殺さなければ小羊を救わないなんて、冷酷なことはぼくの嫌うところ、南無阿弥陀と唱えてくれなければ縁なき衆生だなんて、これも薄情な話だよ。信ずることのできない、魂の放浪者、懷疑から懷疑へとさまよい歩く間に、かろうじて自分の存在と、自分と同じような無数の人々を認め、確かめている彷徨の迷い人、ぼくは、ぼく自身の何ものかを規定することは、残念ながらまだ不可能である。死ぬまで、このような状態なのかしら。

ぼく食べる人、と同時に、ぼく作る人でありたい。テレビの子供漫画や、メロドラマやスリラー物や、それぞれに面白い。植木屋さんの手つきをポカンと見ていたり、路傍の下水工事を見とれていたり、かと思えば、20年後の日本の水鱉鱉のことを考えたり、社会構造の青写真を作ってみたり、あきれてしまう。ぼくの部門は中国語学・文学、地位は大学の教授と、わりに恰好をつけて、世間の人もそう思ってくれて

いる。本人もそんなふりをしている。でも、わたしの心はいつも揺れ動いており、何百人もの同居家族がいるようだ。ヂキル博士もハイド氏もいる。ファウストもメフィストもいる。シャカやキリストが顔を出すかと思えば、ダイバダッタもユダも覗いている。分裂症という言葉があるが、むしろ混沌症といった方がよさそうだ。

輝かしい、そして美しい生命の燃焼、それを時々、自分自身のなかに鑑賞している。ぼくの生命は、バラの花びらに宿る朝露のよう、乙女の瞳をうるませる一滴の涙のよう、マッチ売りの少女の、はかないマッチの火のようでもある。時としては、富士の頂上でみた朝日の壮麗な姿のようでもあり、北海の怒濤をば、湧きあげ、捲き落している大地の力強さのようなものを感じることもある。

わたしは一体何ものか、結局、生命の流れ動くのに任せている、魂のきすらい人なのか、無限のなかに、かすかな存在を許され、与えられている正体不明の一物なのか、茫然として、薄日のなかに群れとぶ粉雪をじっと眺めている。

(湯抱温泉において)

(アジア研究 教授)

## 新 春 回 顧

森 田 武

正月は、竹の節のようなもので、ひとつのくぎりめである。時間のくぎりめは、正月ならずとも人それぞれにあるはずであるが、正月は特にその感じが深く、過ぎた日々への回顧と来たるべき日々への希望とが交錯する。年々歳々それをくり返して来たはずであるけれども、きわ立って印象に残っている正月は案外少ないようである。今年、平素の手ぬるさがたたって、大晦日もおそくまで仕事に追われ、元日もお屠蘇を祝うとそそくさと書齋にはいらなければならぬ仕儀となったので、あわただしい年越しであったけれど、ひとつのくぎりめという感じは、例年になく身に迫るものがあった。今年、長年お世話になった大学を定年で退く年だからである。それだけに、今年の正月は、それに暮れそれに明けた仕事とともに、今後ひとしお印象深く思い出されることであろうと思われる。

それにつけて思い出されるのは、終戦後初めての昭和21年の正月である。当時、外地から引き揚げて郷里にあった私は、母校の小学校の拝賀式に出かけたのであったが、その朝の雲一点もなく晴れわたった空を忘れることができない。新生日本のゆくてを象徴するように思われ、そうあってほしいと念じたことだった。その時すでに広島に職を奉ずることが内定していたので、一つの希望はあったものの、世情の不安はゆくてを遮るようで、心は朝空のように晴れなかった。

ふり返ってみると、そのころが私にとっても大きな転期であった。朝鮮にあって、17世紀初頭の朝鮮の日本語資料を手がけ、中世末近世初期の日本語を研究していた私は、その資料のすべてをかの地に残して帰国した。前後3回の召集を受けたためもあって、思うようには進まなかったけれど、なにがしかの成果を書きとめたものはあったので、それを厳しく制限された引揚げ荷物の中にねじ込んで帰ったが、その支証となる資料はすべて失ったのである。その覚書の束は、いつ召集を受けて戦死するかもしれない、これだけでも学徒の端くれとして残したいと思って書き綴ったものだけに、あの混乱のさ中에서도捨てきれなかったのである。21年の正月に思ったこと

は、不完全でもこの研究に一とおりのまとまりをつけておきたいこと、それと共に今後どんな事を手がけるべきかということであった。広島に行ける、恩師のもとで勉強ができるという希望にはずむ心の一面には、大きな転換を迫られている現実と直面して、光の見えない混迷をどうすることもできなかった。その年の一月下旬に広島に赴任して、少しおちついてから、さきに扱った朝鮮の日本語資料と時代的に近いものと考えて、室町時代の辞書に手をつけてみたり、往來物に目を向けたり、さまざまのことを試みた。

確かそれは昭和24年の春であった。恩師土井忠生先生の計らいで、初めてキリシタン資料に関係することになった。文部省の科学研究費による研究の一員に加えていただいて手伝いをするようになったのである。それは外国人宣教師数名の共編に成る長崎学林版日葡辞書(1603~4年刊)に関する研究で、私の仕事は約32800語にのぼる収録語の各条を一つ一つカードに書き写すことから始まった。ところが、機械的に筆写するだけとしても、説明は中世ポルトガル語で書いてあり、綴字も英語などとは甚だしく違うので、ポルトガル語の知識なしには良心的な仕事はできない。そこで急いでその方の勉強を始めた。今でもポルトガル語の参考書は少ないが、当時はなおさらで、ポルトガル語の文法書も辞書も恩師のを拝借して始め、その後八方手をつくしてようやく入手するというふうであった。そんなことで多少とも辞書が引けるようになると、日葡辞書の中に今日私の郷里の方言(九州方言)として残っている言葉がいくつも出てくるし、国語辞典にまだ収録されていない語や、収録されていてもそれとは語形・意味・用法を異にするものも出て来ることから、この辞書に強くひきつけられるようになった。初めは命じられた書写する仕事自体が目的であったけれど、2年余を費してその全語彙を写し終えるころには、斯界の第一人者である恩師の指導を仰ぎ得るありがたい環境を生かして、できればこの辞書と取組んでみたいという気持ちが次第に強まっていた。

このような私の心の動きを察せられてか、先生は、